

「特別の教科 道徳」におけるアクティブ・ラーニングの探究

黒澤 幸子（現代教育研究所研究員）

齋藤 道子（現代教育研究所研究員）

I 問題の所在と研究の目的

近年、生徒指導上の課題や特別支援教育など、学校が抱える課題は、複雑化・困難化している状況にある。中でも、いじめの問題への対応は、深刻である。

平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における調査結果をみても、小・中・高等学校及び特別支援学校における「いじめ」の認知件数は、188,057 件で前年度（185,803 件）より増加している。特に「いじめ」防止対策推進法第 28 条第 1 項に規定する重大事態の発生件数は 450 件と前年度（179 件）の 2 倍を超え、最近も、「いじめ」を苦にしたとみられる子供の自殺が報じられた。

以前から、校内暴力、学級崩壊、少年犯罪などが社会問題化するたびに、公共の精神や規範意識を高め、自他の生命を尊重し、豊かな人間関係力を育成するべきだという議論が繰り返し行われ、子供たちの問題行動にも対応できる道徳教育が期待されてきた。

このような中、平成 25 年 1 月設置された教育再生実行会議は、同年 2 月第一次提言「いじめ問題等への対応について」を発表し、次のように述べている。

「学校は、未熟な存在として生まれる人間が、師に学び、友と交わることを通じて、自ら正しく判断する能力を養い、命の尊さ、自己や他者の理解、規範意識、思いやり、自主性や責任感などの人間性を構築する場です。しかしながら、現在行われている道徳教育は、指導内容や指導方法に関し、学校や教員によって充実度に差があり、所期の目的が十分に果たされていない状況にあります。このため、道徳教育の重要性を改めて認識し、その抜本的な充実を図るとともに、新たな枠組みによって教科化し、人間の強さ・弱さを見つめながら、理性によって自らをコントロールし、より良く生きるための基盤となる力を育てることが求められます。」

この提言を受け、平成 27 年 3 月には、学習指導要領の一部改正が告示され、平成 30 年 4 月から、道徳の時間は、「特別の教科 道徳」として小学校段階から全面実施されることとなった。平成 27 年 7 月に示された解説によると、「今回の改正は、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものとする観点からの内容の改善、問題解決的な学習を取り入れるなどの指導方法の工夫を図ることなどを示したものである。」とし、「発達の段階に応じ、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の児童が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと転換を図るものである。」としている。

このことは、今までの道徳教育を否定するのではなく、もう一度道徳教育の本質から学校における道徳教育の在り方を見直し、その実現に全力で取り組もうということである。つまり、道徳教育は、これからの教育課程改善において提案されている、育成すべき資質・能力の「三つの柱」のうちの「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の根幹となるものであり、道徳の授業においても「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び（アクティブ・ラーニング）」の視点からの授業改善が求められているのである。

以上を踏まえ、本研究の目的を「『特別の教科 道徳』におけるアクティブ・ラーニングの探究」とし、アクティブ・ラーニングの視点から道徳の授業改善を行い、新たな授業デザインを提案する。

II 研究の内容

本稿では、平成 27 年 8 月に公表された、文部科学省教育課程企画特別部会の「論点整理」を研究し、次期学習指導要領が目指す道徳教育の在り方を明らかにするとともに、アクティブ・ラーニングの視点から小学校における「特別の教科 道徳」の新たな授業をデザインし、検証授業を行う。

1. 学習指導要領改訂の視点

平成 26 年 11 月 20 日に、次期学習指導要領の改訂に向けて文部科学大臣から諮問文が発表された。そこでは、人口減少や少子高齢化、グローバル化などの大きな社会の変化を踏まえ、求められる人材が変化してきていることを記している。

そして、我が国の子供の学力実態からすると、考える力や学習意欲に課題があることから、自信を育て能力を引き出すことがこれまで以上に求められるとし、一人一人の可能性をより一層伸ばし、新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を確実に育んでいくことを目指すべきであると指摘している。そのうえで、国内外における資質・能力の事例を紹介し、「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善を目指していくとしている。

「アクティブ・ラーニング」という言葉は、平成 24 年 8 月 28 日の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」において、次のように示されたところに始まっている。

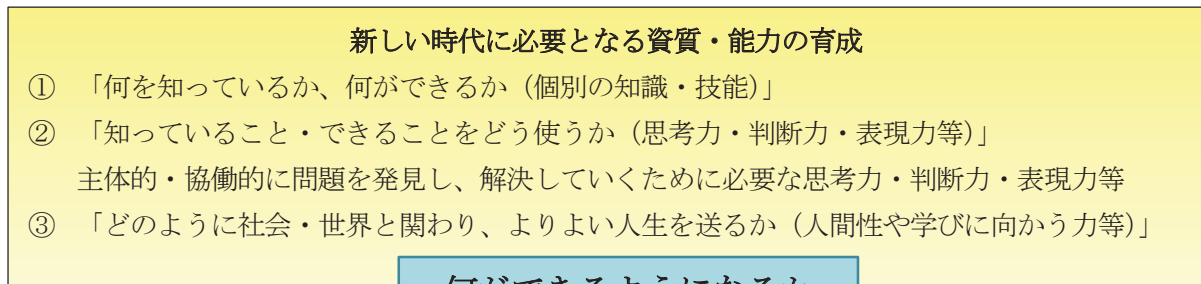
生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。

平成 27 年 8 月、教育課程企画特別部会は、2030 年の社会と、その先の豊かな未来を築くために、教育課程を通じて初等中等教育が果たすべき役割を示すことを意図し、「論点整理」を公表した。

1. 2030 年の社会と子どもたちの未来
2. 新しい学習指導要領等が目指す姿
3. 学習評価の在り方について
4. 学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策
5. 各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性

なお、新しい学習指導要領等が目指す姿として、学習指導要領改訂の視点と育成すべき資質・能力の三つの柱を踏まえた日本版カリキュラム・デザインのための概念を次のように示している。

学習指導要領改訂の視点



何ができるようになるか

育成すべき資質・能力を育む観点からの
学習評価の充実

何を学ぶか

育成すべき資質・能力を踏まえた
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

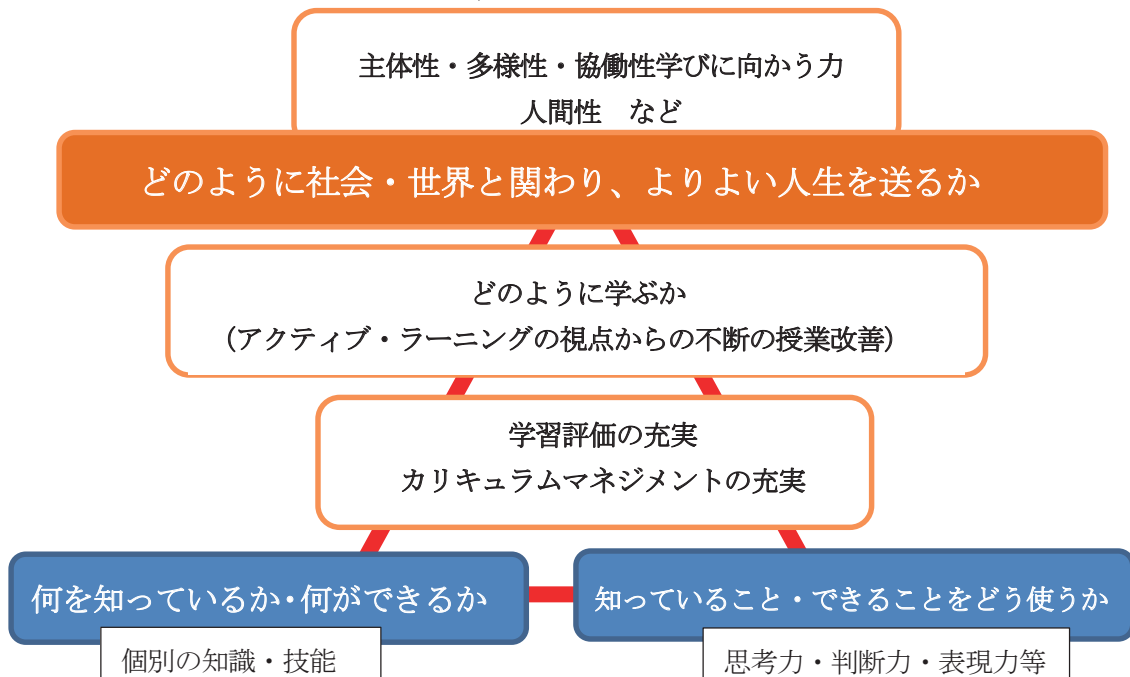
- ◆ グローバル社会において不可欠な英語の能力の強化や、我が国の伝統的な文化に関する教育の充実
- ◆ 国家・社会の責任ある形成者として、また、自立した人間として生きる力の育成に向けた高等学校教育の改善

どのように学ぶか

アクティブ・ラーニングの観点からの
不断の授業改善

- ◆ 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか
- ◆ 他者と協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか
- ◆ 子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか

育成すべき資質・能力の三つの柱を踏まえた日本版カリキュラム・デザインのための概念



2, 「論点整理」に見る「育成すべき資質・能力」と道德教育

論点整理において、道德教育と育成すべき資質・能力の関係については、次のように述べている。

- 学校教育における道德教育は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道德性を目標とする教育活動であり、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の根幹となるものである。
- このような資質・能力の育成を目指す道德教育においては、既に学習指導要領が一部改訂され、小学校では平成 30 年度、中学校では平成 31 年度から、「特別の教科 道德」（道德科）が実施されることとなっている。本「論点整理」が目指す「これからの時代に求められる資質・能力の育成」や「アクティブ・ラーニング」の視点からの学習・指導方法の改善を先取りし、「考え、議論する」道德科への転換により児童生徒の道德性を育むものであり、道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方や他者との関わりについても考えを深める学習を通して、道德的判断力、道德的心情や道德的实践意欲と態度を育てるものである。

さらに、「考え、議論する」道德科への質的転換については、「道德の時間における指導が読み物教材の登場人物の心情理解に偏り、「あなたならどのように考え、行動・実践するか」を子供たちに真正面から問うことを避けてきた嫌いがあることを背景としている。」としている。

つまり、「道德的価値を教えることで内面的資質を育成する」という発想を大切にしながらも、「道德的資質・能力を育てる」という発想に立つ授業が求められていると言える。「論点整理」でも「問題解決型の学習や体験的な学習などを通じて、自分ならどのように行動・実践するかを考えさせ、自分とは異なる意見と向かい合い議論する中で、道德的価値について多面的・多角的に学び、実践へと結び付け、さらに習慣化していく指導が必要であり、答えが一つではない、多様な見方や考え方の中で子供たちに考えさせる素材を盛り込んだ教材の充実や指導方法の改善等が不可欠である。」としている。

3. アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善

(1) 授業改善の視点

上記を受け、アクティブ・ラーニングの視点からの新たな授業デザインを行うために、まず、はじめに「21 世紀型学力の 3 つの力」・「新学習指導要領に明示された 3 つの柱」を以下に整理し、今後の道德の授業改善における具体的な視点を捉えてみたい。

21 世紀型 学力の 3 つの力	新学習指導要領の 3 つの柱	道德科における相応する要素	授業改善の KW ☆授業改善の視点 ★長期的育成要素
基礎力	◆ <u>何を知っているか、何ができるか</u> (個別の知識・技能)	◆ <u>現在、どのような道德性を身に付け、どのような道德的価値を知っているか</u> ☆既得の他律的道德性・道德的価値・行動様式等 ★基礎力 A：道德性の基盤形成に係る要素	☆既得の道德性についての自己認識 ★基礎力 A：感性・情操・関わり・体験・自尊感情等の道德性の基盤形成に関わる要素

思考力	◆知っていること できることをどう 使うか (思考力・判断力・ 表現力)	◆既得の自己の道德性を道德的諸価値の意義 や意味に照らして見つめ、それをどう実際の行 動や生活に反映させていくのか ☆道德的諸価値の理解・自己理解・他者理解・ 人間理解に基づく自律的道德性への移行 ★基礎力 B：協働による学びを通して道德的価 値の深化・統合・補充を図り、内的自己対話を 深めることで新たに獲得する道德的思考力・判 断力・道德的感化力(心情)	☆道德的思考力を高め る(自己理解・他者理 解・道德的諸価値の理 解・人間理解・よりよい 生き方や在り方) ★基礎力 B：洞察力・内 的自己対話力の育成に 関わる要素
実践力	◆どのように社 会・世界と関わり、 より良い人生を送 るか (学びに向かう力・ 人間性等)	◆個としての生き方を社会や他者との関わり の中で捉え、個や社会の一員としてよりよく生 きるためにはどうすればよいのか ☆他者や社会との関係性の中で自己を捉え、よ りよい生き方や自己実現に反映される人格や人 間性 ★生き方について自ら問い続け、主体的に改善、 実践し、自己改革をしていく力	☆道德的資質や能力の 育成(道德的判断力や 道德的心情に基づく道 徳的実践力等の育成) ☆★自己の在り方・生 き方を常に問い、探究 し、自己改革をする力

上記の表から、今後、道德の授業の質的改善を図るには、「論点整理」に明示された“次期改訂の視点は知識・技能・思考力・判断力・表現力・学びに向かう力や人間性など情意・態度等にかかわるものすべてをいかに統合的に育てていくかが重要”である。“の意味が改めて理解される。これを踏まえ、本研究では、道德的「思考力」を核に授業改善を図り、子供たちが主体的に「よりよい生き方」について自分に問い、探究し続ける資質と能力の育成を目指したい。そこで、以下においては、道德科における「思考力」「基礎力」「実践力」とは何かについてもう少し考えてみたい。

(2) 道德的「思考力」を支える道德的「基礎力」

道德の授業において「思考力」を深めるには、考える主体である児童そのものが既得している、あるいは授業の中で新たに考えるための「基礎力」が必要になると考える。例えば、国語の文章を読んでその内容を理解するには、その「基礎的事項」としての言語能力や体験や経験に基づく感性等に加え、それらを横断的、統合的に活用する力としてのリテラシー・コンピテンシー・基礎的汎用力等の「基礎力」が必要となる。これに照らして道德について考えてみると、道德の授業において道德的「思考力」を深めるには、大きく2つの「基礎力」が必要だと考える。その一つは、子供が母親の胎内にいるときから無意識的に獲得される感覚を始め、その後成長に伴って獲得される感情・感性・情操・体験・かかわり・自尊感情・自己肯定感等のいわゆる道德性の基盤形成に係る要素からなるもので「基礎力 A」とする。二つ目は、日常生活における様々な事象を自分というフィルターを通して受け止め、それを自分自身がどのように捉え、価値付け、判断し、行動するのかという、自らの行動体系を組み立てる、洞察力や自己内対話に係る要素を「基礎力 B」とする。これら2つの「基礎力」は、外界とのかかわりの中で日常的に自己の中で無意識的に育まれていると思われるが、道德の授業において、意図的、計画的に道德的価値に照らして自己を見つめさせ、道德的諸価値・自己・他者・人間等への

理解を深めさせることで、脳が基礎力 A・B を総動員して「思考」し、情緒的側面、認知的側面、行動的側面等を統合した新たな道徳的価値を生み出すのではないかとと思われる。

従って、新たな道徳の授業をデザインする上では、「基礎力 A」については、学校・家庭・地域等との連携を更に深め、より小さな時期から道徳教育を意図的に推進し、長期スパンで培っていく必要があると考える。また、「基礎力 B」については、「思考力」を核とした道徳の授業改善を図り、子供自身が道徳的価値と照らして内的自己対話を深める力を培い、主体的によりよい生き方について常に問い、探求し、自己改革を図る資質や能力を育成する必要があると考える。

(3) 道徳的「思考力」

では、次に、道徳的思考力とは何かについて考えてみたい。筆者は、将来子供が会おうであろう様々な場面において、人としてのよりよい生き方や在り方について自ら問い、考え、判断をして行動（実践）するに至らしめる一連の思考過程であると考え。新学習指導要領では、その思考力を高めるための方法としてアクティブ・ラーニングの視点に基づく授業改善を提唱している。従って、以下では、アクティブ・ラーニングについて少し考えてみたい。

<アクティブ・ラーニングの意義>

「論点整理」では、アクティブ・ラーニングの意義について、“思考力・判断力・表現力は、学習の中で主体的・協働的な問題発見・解決の場面を経験することによって磨かれていく。また、身に付けた個別の知識や技能も、そうした生活経験の中で活用することにより定着し、既存の知識や技能と関連付けられ、体系付けられ、体系化されながら身に付いていき、ひいては生涯に亘り活用できるような物事の深い理解や方法の熟達に至ることが期待される。”としている。

つまり、アクティブ・ラーニングの視点に基づく授業改善の目指すところとは、変化が激しく多様な価値観にあふれ、先を見通すことが益々難しいこれからの社会を生き抜くためには、様々に押し寄せる諸課題に正対し、よりよい自己の生き方を生涯に亘って主体的に問い、課題を見出し、他者と共に学び考える中で解決を図り、自己や自己が生きる基盤である社会のよりよい創造を手掛けていく資質と能力の育成を図るものと考え。

また、この視点に立って、改めて新学習指導要領を見てみると、「道徳科の目標は、道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値の理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」とあり、アクティブ・ラーニングの視点に基づいているのがよく理解できる。そこで、以下では、上記を踏まえた具体的な授業デザインを考える。

(4) アクティブ・ラーニングの手法に基づく授業デザイン

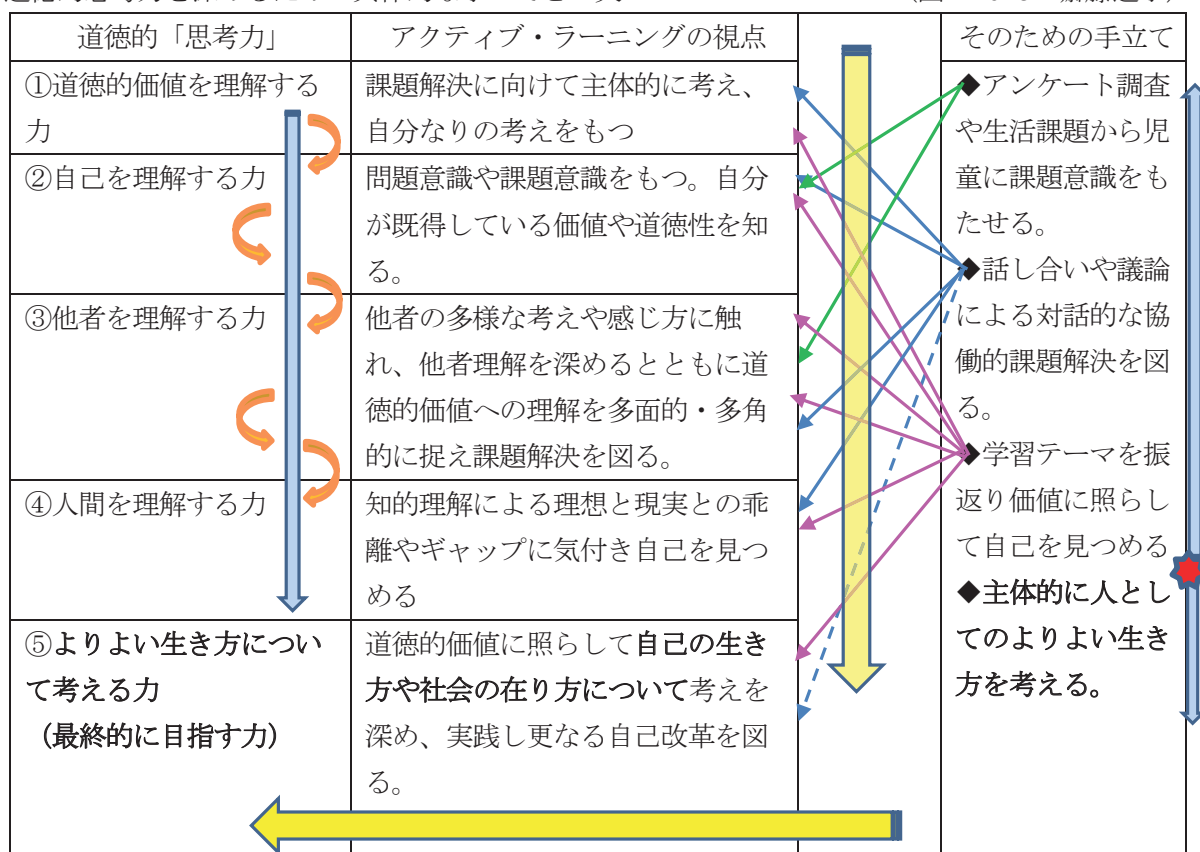
道徳の授業における「思考力」に係る具体的要素には、①「道徳的価値を理解する力」②「価値に照らして自己を見つめ自己を理解する力」③「価値に照らして他者を理解する力」④「価値に照らして人間を理解する力」⑤「価値に照らして物事を多面的・多角的に考える力」⑥「価値に照らして自己のよりよい生き方やよりよい社会・集団の在り方を考える力」⑦「日常的な実践を通して自己改革を図る力」があると捉える。

そして、これらの「思考力」を統合的に培う手立てとしてアクティブ・ラーニングの視点に基づく授業改善が正に今求められているのであり、今後、様々な実践研究を通してより有効な指導法を模索し、さらなる指導方法を改善し蓄積していくことが、我々教員に課せられた最も重要なことであると

受け止める。そこで、以下では、上記①から⑦の道徳的「思考力」に関わる諸要素が、授業の中でどのようにリンクしているのかを整理し、それに基づいて新たな授業創りを提案する。

<道徳的思考力を深めるための具体的な手立てと工夫>

(図 2015 齋藤道子)



<アクティブ・ラーニングの視点に基づく道徳的思考を深めるための授業改善の視点>

上記表より道徳的「思考力」を高めるためには、以下の点を意識して改善を図る必要があると考える。

- *「思考力」を支える基礎力 A・B の育成を社会全体としてより長期的に図るようにする。
- *道徳的価値に照らして今の自分を振り返り、学習テーマや本時のめあてを明確にし、個々が課題意識をもって授業に参加するようにする。(課題設定・課題意識)
- *教材を基に話し合い、多面的・多角的な協働的課題解決を図り、それにより価値意識を深め、それを基に人間理解、他者理解、自己理解をより深めて、自己の在り方や生き方について追究できるようにする。また、事前事後の主体的な学習や取組・複数時間による課題解決・相乗効果を上げるカリキュラム・マネジメントの工夫を図る。(協働的・多面的・多角的・統合的・相乗的課題解決)
- *終末で課題や学習テーマに立ち返り、道徳的価値や他者や社会と関連付けて今の自己を見つめ直し、内的自己対話を深めることで、よりよい自分の在り方や生き方についての考えを深めるようにする。(自我と客我・一般的他者との内的自己対話力・学習プロセスの習得に基づく自己改革力の育成)
- *今後、よりよい自分を目指す中で、他者や社会とのかかわりにおいて何ができるのか、何を必要とするのか等について実生活と結びつけて考えさせ、実践力に繋げていく。(実践力)

＊学習プロセスを授業を通して身に付ける中で、道徳的資質や能力に関わる「自律的道德性」「自己改革力」「実践力」を基礎力 A・B の育成とともに図り、統合的に豊かな人間性や人格の形成を図る。

＜具体的な授業デザインにおけるポイント＞

上記表から「思考」をより深めるには、◆話し合いや議論や対話による課題解決の部分と、◆話し合い後に課題や学習テーマについて再度振り返って価値に照らして自己を見つめ直して考える部分がより重要だと思われる。従って、展開に沿って順に考えさせた後に、学習課題やテーマに立ち戻らせ、内的自己対話を意図的に促すことで、子供自身によるよりよい生き方への思考を深めさせたい。

現行の一般的学習過程	新しい学習過程	開発による新学習過程	授業改善の開発学習過程における POINT
			＜一般的な問題解決型学習の基本的プロセス＞ ①問題を見出す②解決を図る（調べる・話し合う・協働する）③解決する（自己の結論を見出す）④生かす（活用する・実践する・解決方法の効果確認） → 新たな問題の発見→上記プロセスの主体的なスパイラル学習による生涯に亘る資質や能力の向上
導入	課題を掴む	つかむ	<ul style="list-style-type: none"> ・子供が課題意識を抱くような教材提示や自己を見つめる投げかけの工夫 ・「学習テーマ」の設定と共有 ・本時の学習の目的、到達目標の共有
展開（前段）	解決を図る	知る・気付く・考える	<ul style="list-style-type: none"> ・教材を通して学習テーマについての課題解決を図る。 ・自他の意見の交流による道徳的価値に対する多面的・多角的な気付きと理解 ・道徳的価値の意義や意味への理解 ・道徳的価値に照らしての自己理解・他者理解・人間理解
展開（後段）	解決する	深める	<ul style="list-style-type: none"> ・「学習テーマ」を道徳的価値に照らして再度考える。 ・道徳的価値に照らしての新たな洞察（価値理解・自己理解・他者理解・人間理解・価値に照らして物事を多面的、多角的に考える力） ・自己のよりよい在り方や生き方への思考（内的自己対話）
終末	生かす	発展させる	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳的価値に照らして自己を見つめ、実践に生かす方法を具体的に考え、実践したり、さらに発展させたりする。（新たな課題の発見）

＜多面的・多角的に考えるとは＞

「多面的」とは、一つの立体をどこから見るかで見え方が異なるというイメージであり、「多角的」とは、一つの立体を見る人数分だけ、感じ方や見方や捉え方が異なるというイメージである。これを道徳に置き換えると、例えば、赤信号を渡っている人を見た時、その事象を危険性の面から捉えるか、

道徳性の面から捉えるのかで、考えが異なってくる。このような捉え方を「多面的」と解釈する。また、歩行者の視点で見るのか、運転手の視点で見るのか、警察署員の視点で見るのかによっても捉え方が異なってくる。このような捉え方を「多角的」と解釈する。つまり、自分が様々な面から事象を捉えるのが多面的な見方であり、一つの事象を様々な人が捉えるのが多角的な見方であると理解する。

4. 実践授業事例

1. 内容項目 個性の伸長 2. 対象学年 高学年（５・６年）
3. 内容項目選択の理由

「個性の伸長」で授業デザインを試みる理由は大きく二つある。第１は、ICT 器機が目覚ましい発展により、グローバル化が急速に進み、変化が激しく価値観が多様化する社会においては、個として、また、自らの生きる基盤である社会の一員としての自己の生き方や在り方を常に問い、生きる目的や指針をしっかりともって生きることが、一層重要になると考えるからである。「自分に授けられたいのちを置かれた環境の下でどう生かし、充実して生きていくのか」は人間の永遠のテーマであり、帰結するところはあくまでも個の問題であると捉える。第２は、多くの教師から「個性の伸長」の授業は、「へーっ、すごいなあ。あの人は優れていたからできたんだ。あの人のように自分にはできない。」と言う段階で授業が終わってしまい、個に立ち返ってそれを実践に結び付けて考えたり、生かしたりすることがなかなかできないという実態があるからである。

そこで、本時では、道徳的「思考力」に焦点を当て、新学習指導要領で低学年に加えられた「個性の伸長」を切り口にアクティブ・ラーニングの視点に基づいて、総合単元的道徳の授業デザインを行う。そして、子供自身が課題意識をもって主体的に学習に取り組み、他者との話し合いや学習活動を通して協働解決を図り、価値理解・自己理解・他者理解・人間理解を多面的・多角的に深める中で、価値に照らして自己を見つめ、よりよい自己の在り方や生き方についての「思考」を深め、自分に自信をもって他者と共によりよい社会を創造する資質の育成し、「実践」に生かす力の育成を試みる。

（１）＜より主体的な思考を深めるための総合単元的道徳の授業デザイン＞

◎学習テーマ(総合の時間)		「自分らしさ」について考えよう。
事前	総合的な学習の時間 (人権教育)	◆自分について知ろう。 ◇「自分発見カード」を用いて、友達と交流することにより、自分や他者が捉えている自分を知り、自他への認識を深める。
第１次	道徳 「個性の伸長」	◆学習課題Ⅰ：「自分らしさ」とは何か。 ◇教材「さかなクン」(文溪堂)を基に筆者が新たに課題解決型のプロセスを意図して独自に映像教材を作成して実施。
第２次	道徳 「個性の伸長」	◆学習課題Ⅱ：「自分らしさ」はどう作られるのか。 ◇教材「私はわたしらしく」(文溪堂・筆者自作)を基に同様に映像資料を作成して実施。
事後	総合的な学習の時間 (キャリア教育)	◆自分のよさや個性を伸ばそう。 ◇専門家を招聘しての職業について学ぶ学習や自分のなりたい職業についての調べ学習とリンクさせ、自分の「未来設計図」を描く。

（２）各授業での様子と課題と成果

紙幅の関係から授業の詳細を写真や子供の WS を提示して具体的に紹介できないため、アクティブ・ラーニングの視点に基づく授業改善に係る点に絞り、以下に整理する。

<事前学習の様子>

「自分らしさ」とは何かを問うことで自分に対する関心をもち、他者と積極的交流を通して互いの特徴への認識を深めて、主体的に学習テーマを捉えた。（課題の発見・把握）

◆成果：「自分らしさ」とは何かを問うことで自分を見つめるとともに、他者との交流を通して更に自己理解を深め、自分自身への関心を高め、「学習テーマ」を主体的に捉えることができた。

◇課題：他者や帰属集団をのかかわりを通して獲得していく自己認識や、「自我」による内的自己対話への認識が薄い。自他への認識を深め互いを理解し合う素地と機会の意図的開発が必要である。

<第１次の道徳の授業の様子>

学習課題Ⅰ「自分らしさ」とは何かについて主体的に考えを深めるため、発問構成とグループによる話し合いによる協働的課題解決を図った。（協働・発見的課題解決）

◆成果：「さかなクン」の生き方から「さかなクンらしさ」がどのように象られてきたのかを捉え、それぞれのよさ・能力・興味関心・特徴・性格などが関わっていることを捉えることができた。

◇課題：「自分らしさ」とは、どのようなもので、どのようにして象られるのかを、教材を通して漠然と捉えた。グループ協議で多々意見が出たが、価値理解や表現力に大きな差が認められた。

<第２次の道徳の授業の様子>

学習テーマを確認後に学習課題Ⅱを提示して学習を進めたことで、第１次で漠然としていた部分を明らかにしようと課題意識を高くもって意欲的に学習に取り組んだ。（協働・探求的課題解決）

◆成果：第１次で課題意識が高められたため、「自分らしさ」とはどう象られるのかを教材を通してより主体的に考えることができた。特に２人の生き方を比較したことで、価値への気付きが効果的に促され、グループ協議での思考の深まりが認められた。（協働的取組や複数時間での取組により、価値への理解・自他や人間への主体的な理解が深まった。WS への書き込みも具体的になった。）

◇課題：学習テーマを設定して総合単元的に取り組ませたことで思考が深められたが、それを表現できる子供と、上手く表現できない子供が見られた。（評価の問題）

<事後学習の様子>

キャリア教育の一環として様々な職業の方を招聘して授業をしたり、調べ学習を行ったりしたことで関心が一層高まり、主体的に自己の生き方について道徳の授業の中でより深く考えることができた。

◆成果：一連の学習のまとめとして開発したウェブ図で「未来設計図」を書かせたことで、自分らしさを伸ばし、生かすために大切な事柄について自ら気付き、具体的な実践に繋げることができた。

◇課題：学習テーマを設定し、アクティブ・ラーニングの視点に基づいて授業を行ったことで、子供が主体的に互いの意見を交流させつつ課題解決に取り組み、道徳的思考を深めることができた。しかし、他の内容項目でも可能なのか。また、「基礎力 A・B」と「思考力」の関連、「実践力」の見取り、道徳的心情の深め方等については、カリキュラム・マネジメントを含め、今後の課題となった。

５．本稿のまとめと今後の課題

本稿は、はじめに文部科学省教育課程企画特別部会の「論点整理」を研究し、教育基本法が目指す教育の目的を踏まえつつ、社会の質的变化等を踏まえた現代的な課題に即して、これからの時代に求め

られる人間の在り方を追究する「特別の教科 道徳」に視点を置き、授業改善を試みた。

まず、社会の激しい変化の中でも何が重要かを主体的に判断できる人間になるためには、一人一人が、自己と自己が生きる基盤である社会の一員としての生き方や在り方について常に問い、生きる目的や指針をしっかりともって生きることが、一層重要になると考えた。そこで、「特別の教科 道徳」の内容項目に追加された「個性の伸長」を取り上げ、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を行った。その結果、子供が主体的に互いの意見を交流させつつ、総合単元的に複数時に亘って深く課題解決に取り組むことができたが、他の内容項目での検証は、今後の課題である。

また、「論点整理」では「道徳科は、教育課程全体を通して道徳教育の成果を上げるために、その核となる役割を果たすことを求めて実施を図るものである。」とし、「そのために、道徳科と各教科等との関係性を明らかにすることを通して、教育課程に占める道徳科の位置づけを明確にする必要がある」としている。そのためには、まず道徳科と同じ「自己の生き方」が目標に示されている「特別活動」や「総合的な学習の時間」、並びに全教育活動との関連性を明らかにすることが今後の課題である。

参考文献

- 1) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における「いじめ」に関する調査結果について, 2015.10
(3)調査結果の要旨, p2
- 2) 文部科学省「教育課程企画特別部会論点整理」2015
*補足資料・育成すべき資質・能力の三つの柱を踏まえた日本版カリキュラム・デザインのための概念, p26 p27
*参考資料・国立教育研究所が整理した資質・能力の構造化のイメージ, p173
・アクティブ・ラーニングに関する議論, p189
・アクティブ・ラーニングの失敗事例調査から, p190
・学習プロセスのイメージ, 192
- 3) 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 道徳教育専門部会
道徳に係る教育課程の改善等について（答申）（案）, 2015
- 4) 天笠 茂監修「次期学習指導要領を見据えた学習と評価」ぎょうせい 2015
- 5) 押谷由夫 柳沼良太 編著「道徳の時代をつくる！―道徳教科化への始動―」
教育出版株式会社, 2014
- 6) 押谷由夫 柳沼良太 編著「道徳の時代がきた！―道徳教科化への提言―」
教育出版株式会社, 2013
- 7) 溝上 慎一「大学教育から初等中等教育へと降りてきたアクティブ・ラーニング」梶田 叡一 責任編集・人間教育研究協議会編『教育フォーラム 56 アクティブ・ラーニングとは何か』金子書房
- 8) 田村 学著「授業を磨く」東洋館出版社, 2015
- 9) 文部科学省「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議 議事録」2015